様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年５月２２日現在

機関番号：３４５３３
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2009～2011
課題番号：２１５９２９３３

研究課題名（和文）
認知症高齢者グループホームの終末期ケアにおける看護連携システムの開発

研究課題名（英文）
Development of a Nursing Cooperation System in End-of-Life Care at Group Homes for Older People with Dementia

研究代表者
平木　尚美（HIRAKI　NAOMI ）
兵庫医療大学・看護学部・講師
研究者番号：10425093

研究成果の概要（和文）：
本研究の目的はグループホームにおける終末期ケアの看護連携システム案を作成し，その効果を評価することである．本研究ではアクションリサーチと SSM 方法論を基盤に，①看護連携システム案を作成するプロセス②作成した看護連携システム案を導入し，評価を行った．その結果に基づき，グループホーム職員が看護職と連携を促進するためのシステムとして，簡素に記録できる連携シートや連携マニュアルを活用する，各時期に沿って事例検討会を実施する，職員のリフレクションをサポートするという内容で看護連携システムを構築した．

研究成果の概要（英文）：
The purpose of this study was to create a nursing cooperation system in end-of-life care at group homes and to evaluate the system.　This study was based on an action research and the SSM method, and it was also composed of two stages: (1) creating a nursing cooperation system and (2) implementing and evaluating the system.

As a result, because of the demand mentioned above, to expedite cooperation between care workers and nurses effectively and efficiently, cooperation manuals and record sheets were introduced, and workshops and case study sessions were provided periodically.　The system was developed as supporting the staffs' reflections.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	1,900,000	570,000	2,470,000
２０１０年度	1,100,000	330,000	1,430,000
２０１１年度	500,000	150,000	650,000
総　計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：医歯薬学
科研費の分科・細目：看護学・地域・老年看護学
キーワード：認知症高齢者，グループホーム，終末期ケア，看護連携，システム開発

様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

１．研究開始当初の背景

看護職の配置が法的に義務付けられていない認知症高齢者グループホームの終末期ケアにおいて，本人や家族の期待は高まる一方で職員は提供できるケアに限界を感じ，死に対する恐怖や不安の中でケアしていることが課題となっている．解決方法として終末期ケアに必要となる看護ケアを外部機関と連携により充実させ，さらに施設内の職種間の連携を促進させるシステムを開発することが必要であると考えた．

２．研究の目的

グループホームにおける終末期ケアの看護連携システム案を作成し，その効果を評価することである．

３．研究の方法

対象および期間: 対象は近畿地方および中国地方のグループホームで勤務する職員 98 人(年齢 44.1±11.40 歳，終末期ケア経験あり群:n=52 ，終末期ケア経験なし群:n=46)．調査期間は，2011 年 4 月から 2012 年 2 月までとした．

データ収集: 集合的な終末期ケア研修会を実施し，その前後(ベースライン・3 か月後)に定量データとして死生観尺度の自記式質問紙調査を行った．また，定性データとして，5 施設のグループホームにフォーカスグループ・インタビュー，看取りを終えた家族 2 人に対して半構成的面接を行い，終末期ケアの満足度についてデータ収集を行った．

分析:グループホーム職員の死に対する認識(死生観)の変化確認するために，死生観尺度を用いて研修会受講前後の死生観の変化を測定した.死生観尺度の下位項目の合計得点の平均値の比較は，Wilcoxon 符号付順位和検定を用い，集合研修前後の死生観の比較には反復測定二元配置分散分析を用いた．死に対する認識の変化や家族の終末期ケアに対する満足度は半構成的面接によってデータ収集した IC レコーダの内容は逐語録を作成し，質的に死に対する認識の変化について内容分析を行った．

これらのデータから，mix method 法で集合的研修会および事例検討会を含んだ看護連携システム案の有効性および効率性について分析した．

（倫理面への配慮）

研究実施にあたり，愛知県立大学倫理審査委員会の承認(22 愛県大管理第 2-22 号)をうけた後に実施している．また，グループホーム施設長ならびに訪問看護ステーション管理者に対して文書による研究協力依頼を行い，承諾の得られたグループホームと訪問看護ステーションに勤務する職員に対しても研究協力依頼を行い，書面で同意を得た．研究への参加は自由意思であり途中離脱の自由，勤務上の処遇に影響しないこと，個人情報保護の保障を書面に明記し，同意が得られた方を対象とした．事例検討や研修会で知り得た個人情報は利用者や施設の情報も含めて口外しないことを説明し同意を得た．

研究参加者の内省を質的データとするため，「思い」を強制したりしないようにインタビュー時は，話しやすい雰囲気を作り，個別にインタビューした．その際には，参加者の希望する場所でプライバシーの保持ができる個室(もしくはそれに代わる場所)で行った．研究者と参加者の関係は強制力が働かないように説明し，同意の有無にかかわらず業務条件や処遇には影響しないこと，また一度

同意してもいつでも撤回できることの参加の自由を保障した．参加者が，研究に参加することで悲嘆の時期に自己のケアの役割不足に直面し，自分のせいで死亡したのではないかと精神的な負担を感じることが予測される．しかし，一度同意したとしても，悲嘆の時期であり冷静に回答できないと判断した場合や予測的状況に陥った場合はすぐにインタビューを中止するとともに，本研究に関係していないグリーフケアを専門としている臨床心理士やサポートグループの専門家もしくはリエゾン看護師(CNS)に治療的処置を依頼し精神的ケアを行う環境を整えたうえで実施した．その際の費用は研究者が負担することを説明した．また，精神的負担を感じないように①事前にグループホームを訪問するなど職員と研究者が関係性を構築くたうえで研究に参加してもらう，②インタビュアーは，熟練した質的研究者スーパーバイズのもとに面接を実施する，ことで倫理的配慮を保障した．

研究により得られたデータは，すべて統計的な処理を行い，研究終了後はシュレッターにより廃棄処分する．電子媒体は，パスワードのかかる専用のコンピュータを使用し，電子データも専用ソフトを用いて削除することを確認している．

４．研究成果

⑴　対象の属性

98 人のうち，女性 74 人(75.5%)，男性 24 人(24.5%)であった．平均年齢は，44.1 歳(±11.41 歳)であり，経験年数は平均 7.7 年(±9.35 年)であった．有資格(複数回答)としては，介護士(ヘルパー)が 110 件，次いで介護福祉士 89 件，看護師は 37 件であった．回答者の勤務するグループホームの開設年数は平均 5.2 年であり設置主体は，株式会社が 48 件(50.5%)と最も多かった．施設管理者の職種としては，看護師 48 件(51.1%)であり，次いで介護福祉士 25 件(26.6%)であった．看護師の雇用状況については，常勤雇用 42 件(50.6%)が最も多く，非常勤雇用 19 件(22.9%)，介護職として雇用 12 件(14.5%)であった．

⑵ 知識の向上

知識確認表を用いて，研修会前・研修会直後・3 か月後に回答してもらった．各項目の答数の推移を CochranQ 検定で比較したところ，すべての項目において有意な上昇を認めた．また，10 項目の合計得点の推移は Friedman 検定により有意な変化を示していた

($p<0.001$)．研修会直後と研修会 3 か月後の中央値の差は認めないことから，知識の習得状況は研修会 3 か月後までは保持されていた．

⑶ 死に対する「恐怖・不安」の認識の変化

死生観尺度の下位項目の合計得点の平均値の比較では，「恐怖・不安($p=0.02$)」と「目的($p=0.03$)」に関して，有意に差を認めた($p<0.05$)．また，集合研修前後の死生観の比較では，「恐怖・不安」において有意に差を認めており，終末期ケア研修会の実施は，グループホーム職員の終末期ケアに対する不安や恐怖を緩和することにつながっていたことが明らかになった．

半構成的面接の結果から，記録の効果として介護職から看護師，そして医師へ連絡する体制が整っており記録用紙を活用することで医師や訪問看護師とスムーズに連絡できるので疑問や課題を速やかに解決でき恐怖や不安が軽減していたことが明らかになった．また，事例検討会を行うことで，職員間の恐怖や不安を含めた終末期ケアに対する「思い」を吐露する場となり，臨終期に訪室のタイミングを確認し，各職種の役割を確認することやケア方法の情報交換の機会にな

り安心感につながっていた.

(4) 終末期ケアにおける家族の満足度

家族は, 常時付添えないときなど[記録を確認することを楽しみ]にしており, 死を迎えるまでの[苦痛がいつまで続くかわからない状態を見ることが辛い]と感じていた. 訪問看護師とは介護職を通じての連絡になるため直接の面識がなく話ができなかったので看護師には常駐してほしいと願っており, [終末期ケアに家族は心残りがある]と感じていた. しかし，最期まで入浴介助や食事に工夫をしてもらったことなど職員の配慮に満足し，家族の希望を伝えることができたことや本人や自分も最期までよくやったと[グループホームでの看取りに満足]していた.

考察:

(1) 集合的研修会の効果

集合的研修会の効果として，研修会を受講することで得た終末期ケアの知識から，職員は死のプロセスを理解し、どの時期に訪室する必要があるのか，また臨終が近いことの予測ができることで自分のせいで亡くなったのではないかという困惑が軽減し，死に対する「恐怖や不安」が緩和したと考える.

(2) 事例検討会の効果

事例検討会を行うことで，職員間の恐怖や不安を含めた終末期ケアに対する「思い」を吐露し，ケア方法の情報交換，不安に思っているのは「自分だけではない」，自分が行ったケアは「これでよいのだ」と自信とその人に寄り添うケアを役割として認識ができたため安心感につながったと考える．また，必要時に吸引の時間や回数を調整したり，ケア方法の再確認や役割分担を調整するといったことにつながっており，効率的にケア実践するための連携システムが構築できたと考える．このことは,「不安や恐怖」の感情を残したまま次の事例に向かうのではなく，事例検討会で自己の行ったケアの意味づけができたと考える.

(3) 記録を含めた連携シートの効果

連携シートの効果として，記録用紙を活用することは往診や情報の共有をすることで効率的であった．また，家族も記録の内容を閲覧することで情報源の１つとして楽しみにしていた．このことは終末期ケアにおいて，職員にとっても家族にとっても連携をスムーズに行うように有効に機能していたと考える.

(4) 終末期ケアにおける家族の満足度

家族は，ずっと付き添えないときなど記録を見て状況を把握することを楽しみにしており，父親の最期をグループホームで看取ることができてよかったと語っていた．それは, 本人や自分たちの気持ちを汲み取り最期までグループホームというなじみの環境のなかで家族に見守られながら見送ることができた達成感を得ている結果だと考える．家族は，ケアの一員になることができ，家族は悲しいという感情よりも職員の心の温かさを感じていた．このことは連携マニュアルの活用により職員と家族が役割認識をしたうえで，各役割遂行することができ，最期まで職員とともに自分たちもよくやったという「別れ」を迎えることができたので満足感を得ることができたと考える.

結論:

グループホーム職員が看護職と連携を促進するために，簡素に記録できる連携シートや連携マニュアルを活用し，各時期に沿って事例検討会を実施し，職員のリフレクションをサポートするとともに施設内外において終末期ケアを効果的かつ効率的に連携することができるシステムを開発した.

看護連携システムの評価の視点として，知識の向上, 死生観の変化, 家族の満足度から,

連携システムの有効性および終末期ケアの記録と連携に関するマニュアルの活用による効率性の確認を行った．

知識の向上では，知識確認表の回答からすべての項目において有意な上昇を認めていた．死生観尺度の変化に着目し測定したが，死に対する恐怖や不安が緩和している傾向がみられた．家族の満足感については，最期まで入浴介助や食事に工夫をしてもらったことなど職員の配慮に満足し，職員や自分も最期までよくやったと満足していたことが明らかになった．今後は，対象を拡大しシステムのさらなる充実を目指すことが課題である．

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

① 平木尚美, 百瀬由美子(2011):認知症高齢者グループホームの終末期ケアにおける看護活動の実態と介護職が看護師に期待する役割．日本看護福祉学会誌 Vol.16 No.2. 85-96.（査読有）

② 平木尚美, 百瀬由美子(2010):認知症高齢者グループホームの終末期ケアにおける連携体制と課題．日本看護福祉学会誌 Vol.16 No.1. 53-64.（査読有）

③ 平木尚美, 百瀬由美子(2010):スウェーデン王国の認知症高齢者の終末期ケアの実態と課題 -ストックホルムの高齢者ケアシステムと訪問医療「ASIH」からの学び-.愛知県立大学紀要 Vol.16. 59-66.（査読有）

〔学会発表〕（計７件）

① N.Hiraki,Y.Momose(2012): Workshop Participants Changed Staffs' Recognition for Death. 1ST World Congress on Healthy Ageing 2012. 2012.3.20. Kuala Lumpur

② 平木尚美, 百瀬由美子(2011):認知症高齢者をケアするグループホーム職員の死生観．第 16 回日本老年看護学会学術集会 2011.6.17.東京（NS スカイカンファレンス）

③ N. Hiraki ,Y. Momose (2011): Nursing Practices in End‐of‐Life Care and Problems in Nursing Cooperation at Group Homes for Dementia in Japan. 26th International Conference of Alzheimer Disease International. 2011.3.27 カナダ.

④ 市政貴恵, 泉香奈子, 平木尚美(2010):認知症高齢者グループホームの看取りに必要なこと.第 11 回認知症ケア学会学術集会 2010.11..

⑤ 平木尚美,百瀬由美子:グループホームの終末期ケアにおける看護師活動の実態と期待されている看護師の役割．第 15 回日本老年看護学会学術集会 2010.11.6. ベイシアホール（群馬県）

⑥ Naomi Hiraki, Yumiko Momose (2010): Medical Cooperation for Dementia End-of-Life Care in Japanese Group Homes. 25th International Conference of Alzheimer Disease Imternational ADI 2010 2010.3.12

⑦ 平木尚美, 大町弥生:認知症高齢者グループホームの終末期ケアにおける医療連携の取り組みと看護師への期待．第 14 回日本老年看護学会学術集会 2009.9.26.札幌コンベンションセンター（札幌）

６．研究組織

(1)研究代表者

平木 尚美（HIRAKI NAOMI）
兵庫医療大学・看護学部・講師
研究者番号：10425093

(2)研究分担者

青木　菜穂子（AOKI NAHOKO ）
兵庫医療大学・看護学部・准教授
研究者番号：50510997

百瀬　由美子（MOMOSE YUMIKO）
愛知県立大学・看護学部・教授
研究者番号：20262735

天木　伸子（AMAKI NOBUKO）
愛知県立大学・看護学部・助教
研究者番号：40582581